

セデック語パラソ方言の数詞と関連表現について*

落合 いずみ

Numerals in Paran Seediq and Related Expressions

Izumi OCHIAI

要旨：本稿では、現代におけるセデック語パラソ方言の数詞とその関連表現について、1920年の調査による先行研究 Asai (1953)との比較も交えながら記述する。まず数詞の形式から始まり、類別詞的表現との共起、日数表現、「今日」を中心にした日の表現と数詞、回数表現、分配表現、共同作業の表現、人数表現などを議論する。

キーワード：セデック語 数詞 内的再建 記述言語学

1. はじめに

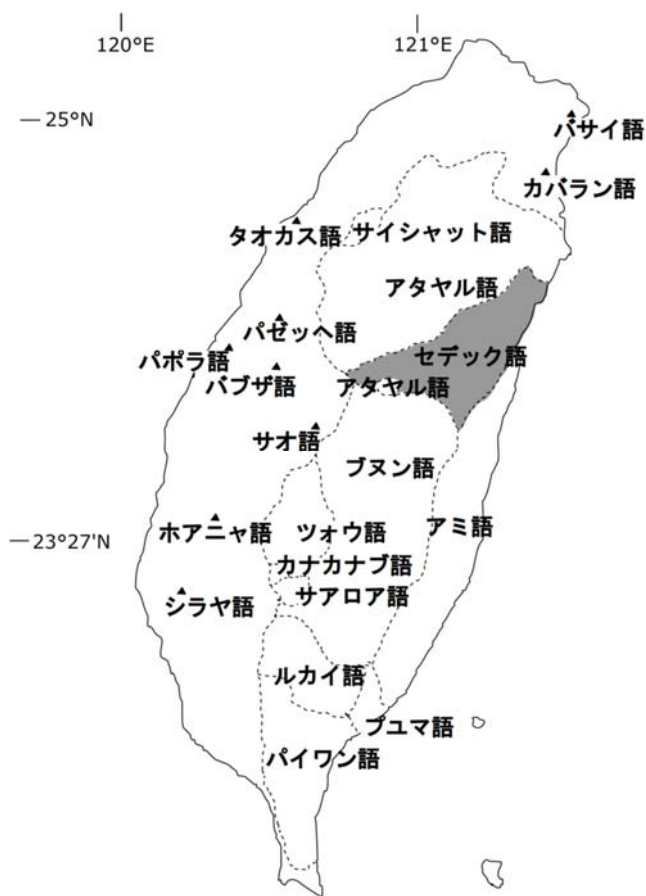
オーストロネシア語族に属す台湾先住民の言語、セデック語トゥルク方言について、月田 (2009: 131–132, 237–245)が数詞とそれにまつわる表現について詳細に記述している。セデック語のもう一つの方言、セデック語パラソ方言では、Asai (1953)において数詞とそれにまつわる表現についての記述が見られるが、この記述は 1920 年の調査に基づくものであり、その記述の検討や詳細の補足などは未だになされていない。本稿の目的は Asai (1953)における 1920 年代のセデック語パラソ方言の記述と比較しながら、現代のセデック語パラソ方言の数詞と数詞にまつわる表現について総合的に記述することである。

セデック語は、台湾で話されているオーストロシア諸語のひとつである。アタヤル語とともに、アタヤル語群に属する言語である。セデック族の人口は約二、三万人と目されるが、話者人口は半数を下回る。台湾の中央、南投縣仁愛郷に位置する霧社という地域を起点に北東に分布する(地図 1)。一部は仁愛郷から中央山脈を越え、台湾の東部へと移住し、北東部海岸に迫る地域にまで広がった。支族の分類としては、パラソ系、トダ系、トゥルク系の三つがあるとされる。本稿で扱うセデック語パラソ方言は、パラソ(霧社)一帯で話されていた言語である。現在も霧社付近に残る集落は、眉溪集落を残すのみになり、その他のパラソ系集落は日本統治時代 1930 年代に仁愛郷の片隅へと強制移住させられた。筆者のフィールド調

*本稿は 2014 年 12 月 6 日における研究発表「セデック語・パラソ方言の数・数詞・数量詞について」(チベット=ビルマ言語学研究会第 34 回例会)の一部を修正・補充したものである。発表原稿に助言をいただいた野島本泰氏をはじめ、発表時にコメントをくださった方々、本稿の査読をしてくださった方々に感謝する。ただし本稿の不備は筆者の責任である。

査は、この強制移住集落の一つであるグルバン(清流)集落において行った。この集落において、セデック語パラソ方言はすでに、年配者同士(70代以上)が話す場合、または両親ともにセデック族の家庭において、年配の親に50代から60代の子供が話しかける場合にしか用いられなくなっている。中高年層はセデック語を話す能力はあるものの中高年層のセデック族同士の会話ではほぼ中国語が用いられる。セデック語は若年層には後継されていない。本稿の主要な調査協力者は、2014年当時70代の男性一人、70代の女性1人、50代の男性一人である。

地図1: 台湾全土とセデック語の分布



セデック語パラソ方言の音素は母音5つ/a, i, u, e, o/, 半母音2つ/j, w/, 子音16 /p, t, k, q, b, d, g, m, n, ŋ, s, x, h, ts, l, r/である。これらのうち、/j/と/ts/は表記上yとcを用いる。アクセントは次末音節に置かれる。次末音節前の音節における母音は弱化を被り、uに変化する。接尾辞の付加によりアクセントの置かれる音節が後部にずれた場合、本来のアクセントを持っていた音節が、弱化を被ることになる。例えば、*tára*「待つ」が、*turá-i*「待て」(<*tara-i*)となる。

2. 数詞の形式

基数詞の形式を表1に挙げる。右に挙げた1920年代の形式はAsai(1953:50-51)における、

浅井恵倫の1927年の調査における資料、右は筆者の調査による現代の形式である。参考として疑問詞「幾つ」も加えた。以下 Asai (1953)からの引用は、筆者が多少表記方法に修正を加えている。

表1 数詞の形式

	1920年代	現代
1	<i>kijal, kiŋal</i>	<i>kiŋan</i>
2	<i>daha</i>	<i>daha</i>
3	<i>teru</i>	<i>teru</i>
4	<i>sepat</i>	<i>sepac</i>
5	<i>rima</i>	<i>rima</i>
6	<i>mumuteru, muteru</i>	<i>mumuteru</i>
7	<i>mupitu, pitu</i>	<i>mpitu, mupitu, umpitu</i>
8	<i>mumusepat</i>	<i>mumusepac</i>
9	<i>muŋari</i>	<i>muŋari</i>
10	<i>maxal</i>	<i>maxan</i>
11	<i>maxal kijal</i>	<i>maxan kiŋan</i>
12	<i>maxal daha</i>	<i>maxan daha</i>
13	<i>maxal teru</i>	<i>maxan teru</i>
20	<i>mupusal</i>	<i>mpusan, mupusan</i>
21	<i>mupusal kijal</i>	<i>mupusan kiŋan</i>
23	<i>mupusal teru</i>	<i>mupusan teru</i>
30	<i>muterul</i>	<i>muterun</i>
31	<i>muterul kijal</i>	<i>muterun kiŋan</i>
32	<i>muterul daha</i>	<i>muterun daha</i>
40	<i>musipatl</i>	<i>musupatun</i>
50	<i>murimal</i>	<i>muriman</i>
60	<i>mumuteru kumuxalan</i>	<i>mumuteru kumuxalan</i>
70	<i>mupitu kumuxalan</i>	<i>mpitu kumuxalan</i>
80	<i>mumusepat kumuxalan</i>	<i>mumusepac kumuxalan</i>
90	<i>muŋari kumuxalan</i>	<i>muŋari kumuxalan</i>
100	<i>kijal kəbekuy</i>	<i>kiŋan kubekuy</i>
幾つ	<i>piða¹</i>	<i>piya</i>

¹ この形式は Asai (1953:49)から引用した。

まず、注目されるのが数詞 6 と 8 の成り立ちである。小川(1944:486–487)がすでに述べているように、数詞 6 の *mumu-teru* は数詞 3 の *teru* から派生され、数詞 8 の *mumu-sepac* は数詞 4 の *sepac* から派生される。それぞれ、3+3 または 3×2、4+4 または 4×2 という算数を行っていることがわかる。これを示すのが接頭辞の *mumu-*ということになる。

ほかに特徴として挙げられるのは、数詞 6 から 10 まで全て子音 *m* から始まるということである。数詞 6, 7, 8, 9, 10 のうち数詞 6 と 8 については先に述べたように、*mumu-*という接頭辞が付いているのだが、実は数詞 10 の *maxan* にも接頭辞が付いている。語中の *xa* に当たる配列音は実は数詞 1 を表す非独立形式であり(Ochiai 2019)、この前に *ma-*という接頭辞、この後に *-n* という接尾辞が付いていることになる。接尾辞 *-n* は 1920 年代には *-l* と記録されており、これはオーストロネシア祖語において 10 を表す接頭辞として再建されている **-N* (Zeitoun et al. 2010:875)に由来する。接頭辞の *ma-*の機能は定かではないが、数詞に付く接頭辞と考えていだろう。恐らく、数詞 6 と 8 に用いられる接頭辞 *mumu-*も古くは *ma-*に遡ると考えられる。例えば、セデック語パラン方言の最も古い記録とされる Bullock (1874:43)では、数詞 6 を *mataru* と記録している²。この *ma-*が重複されて *mama-*になり、さらに次末音節前の母音弱化によって *məmə-*に、そして現代では *mumu-*に変わったと考えられる。

数詞 7 に見られる語頭の *m* (*m-*, *mu-*または *um-*)もこの *ma-*に由来するものと考えられる。オーストロネシア祖語の数詞 7 は **pitu* (Blust and Trussel 2010)であることから、セデック語パラン方言には接頭辞が付いていることが明らかである。接頭辞を附加する動機と考えられるのが、6 から始まる数詞の頭韻を統一するということである。接頭辞を持つ 6 と 8 に挟まれた 7 が、これら頭韻の圧力を受けて接頭辞を付すようになったのだろう³。ただ 7 において接頭辞に自由変異が見られる。これは本来 *ma-*だったものが、母音弱化によって *mu-*になるほかに、*mu-*に後続する同器官の子音 *p* の働きにより、母音が脱落し *m-*のみ残ったもの(ただし *m-*は成節子音となる)、または *m* の前に母音の *u* が挿入されたもの(*-um*)である⁴。数詞 9 は、他のオーストロネシア諸語に同源語を探すことができず、由来は定かでないが、語頭に *m* を持つことはほかの数詞 6 から 10 までと同様である⁵。

数詞 11 から 19 までは、数詞 10 の後ろに端数をそのまま加えることで表す。例えば、11 は *maxan kiŋan* (10, 1)だが、これら二つの語は音声的には一つのまとまりを成し、アクセントは [maxan 'ki.ŋan] のように後部の語にのみ置かれる。

数詞 20 については、非独立形数詞 2 の *pusa* に対し、接頭辞 *mu-*または *m-* (古くは *ma-*)と 10 の倍数を表す接尾辞 *-n* が付いている(自由変異形の *m-*は数詞 7 の場合と同様、後続の同器

² この時代では、*ma-*という重複のない接頭辞だけで倍数を表していたことになる。

³ このように頭韻を統一する音韻変化は、セデック語において、数詞以外、他の語類では見られない。

⁴ これは *mu-*からの音位転換により *um-*になったとの見方もできる。ただ、どちらかというとも *m* のみで音節を成すことが不安定なため、音節を強化するために母音が前に添えられたとの印象を受ける。

⁵ トゥルク方言の数詞 9、*məŋari* について月田(2009:239)では、*səŋari* 「残り」という語と関連するかもしれないと述べている。同じくトゥルク方言の数詞 9 について、Pecoraro (1977:170)では、「取る」という語から派生するとしている。筆者は月田に同意する。セデック語の数詞 9 はパラン方言の *musuŋari* 「物が残る」(上のトゥルク方言と同源関係)または *nusuŋari* 「残り物」(語根はともに *ŋari*)に由来すると考える。この点については、Ochiai (2016:317–318)にも記述している。

官子音 *p* の働きにより、母音が落ちたもの)。この *pusa* は、セデック語において単独で現れることはなく、常に接尾辞 *-n* を伴って現れる。しかし、数詞 3、4、5 に対して接尾辞 *-n* と接頭辞 *mu-* を付すことで作られる数詞 30、40、50 との並行的な派生関係を鑑みれば、*pusa* が語根として析出されることがわかる。この *pusa* は Zeitoun et al. (2010:872–874) が再建したオーストロネシア祖語の数詞 2 の非独立形 **puSa* に遡るものである。

数詞 30, 40, 50 は数詞 20 と同様の構成を示し、それぞれ数詞 3, 4, 5 (*teru, sepat, rima*) に接頭辞 *mu-* と接尾辞 *-n* を附加することで表す。ただし、40 に関しては数詞 4 のより古い形式である語末が *t* の形式—Asai (1953) に見られる形式—を用いる。また、*sepat* に *-n* を附加すると子音連続が生じる。この子音連続は Asai (1953) の形式に表記されているが、現代では、子音連続の間に母音 *u* が挿入され、*mu-supat-un* となる。語根 *sepat* の次末母音は、再分節化によって前次末母音となるため母音が弱化する。

数詞 60, 70, 80, 90 は同一のパターンから成る。それぞれ数詞 6, 7, 8, 9 の後に、*kumuxalan* という語を置く。この語は、非独立形数詞 *xa* から派生された数詞 10 の *maxan* の、より古い形式である *maxal*—Asai (1953) の表記に見られる形式—を語基とする。この *maxal* に対し、接頭辞 *ku-* と接尾辞 *-an* が付き、全体として 10 の倍数を表す語になっている。

数詞 100 は、数詞 1 のあとに *kubekuy* という語を用いる。この語は、語根 *bekuy* 「縛る、束ねる」という語に対し、接頭辞 *ku-* が付いている。これは *kumuxalan* に見られた接頭辞と同一のものと考えられる。「千」を表す単一の語は無く、数詞 10 の後に「百」を表す *kubekuy* を置くことで表す (10×100)。つまり *maxan kubekuy* となるのだが、自然発話でこれほど大きな数字を用いることはない。

それどころか、現代では 11 以上になると、日本語からの借用形式または中国語を用いるのが一般的である。しかも中高年層では、20 をセデック語でどう言うか分からない場合も少なくないため、20 以上になるとほぼ借用形式を用いる。これは、20 に見られる非独立形 *pusa* 「2」の出現率が極めて低く、*pusa* が本来「2」を表すことが忘れられ、数詞 20 と 2 との関連を見出すことができなくなったためと考えられる。

これら数詞は名詞が指す物の個数を表すのに用いられる。数詞と名詞とが名詞句を成す場合、これらの語順は数詞が先、名詞が後となる。因みに、セデック語の名詞は特殊な場合を除き⁶、単数であるか複数であるかの形式上の区別はない。以下(1a–b)に例を挙げる⁷。これらの例は、音韻的に一つのドメインを成し、後部の語にのみアクセントが置かれ、[kiʝan 'mudu], [daha 'mudu] と発音される。

- (1) a. *kiʝan* *mudu*

⁶ 特殊な場合とは、いくつかの特定の名詞には重複形が存在し、重複形が複数を表すのに使われていたらしいことである。例えば、*ruseno* 「男」が *rusuruseno* という重複形になり「男ら」を意味するということが、Holmer (1996:29) に見られるが、この派生はもはや生産的ではない。

⁷ 本稿で用いる略号は CAUS 使役、COND 条件、DES 願望、DIST 分配、EMPH 強調、EXIST 存在、FUT 未来、GEN 属格、IMP 命令、INCL 人称代名詞包括形、IRR 非現実、NOM 主格、PART 終助詞、PL 複数、PROH 禁止、RDP 重複、SG 単数、SV 静態動詞、UVL 非動作主態(場所主語)、UVP 非動作主態(対象主語)である。

- one orange
「一個の蜜柑、蜜柑一個」
- b. *daha* *mudu*
two orange
「二個の蜜柑、蜜柑二個」

これら数詞は、例(2)のように述語として働くこともある。セデック語の述語は文頭に現れるため、述語として働く数詞も文頭に現れる。この場合、例(1)と違い、数詞にアクセントが置かれる。

- (2) *kiŋan* =*naq* *lukus* =*mu*
one =only clothes =1SG.GEN
「私には一着しか服がない」

3. 類別詞的表現との共起

セデック語パラン方言において類別詞という品詞を敢えて立てる必要性はない。というのも類別詞的な働きをする語は見られるものの、それらは単独の名詞として働き得るからである。これら類別詞的な働きをする語を本稿では類別詞的表現と呼ぶことにする。Asai (1953:53)が *nouns of measure* と呼び、例を挙げたものの中には、数詞と共起するものが2つ見られた。以下(3-4)ではこれら Asai の例とともに現代において相当する表現を挙げる⁸。ただし(4)については、*kaŋao* (4a)に相当する語が現代では見られなかったため、構造上類似の表現を現代での例として挙げた。

- (3) a. *kiyal* *sese* (1920年代)
 one fathom
 「一尋」
- b. *kiŋal* *sese* (現代)
 one fathom
 「一尋」

これらでは数詞1の後に類別詞的表現の *sese* 「尋」が置かれている。以下(4)では数詞の次に類別詞的表現、さらにその次に名詞が続く。

- (4) a. *kijal* *kaŋao* *tiyu* (1920年代)

⁸ 査読者の一人が指摘するように、(3a)では *sese* 「尋」という単位だけでの表現で提示されており、修飾される名詞を伴っていない。そのため *sese* が類別詞として使われているかどうかは実際のところよくわからない。

	one	extending	finger	
	「5 インチくらい (指を広げた長さ)」 ⁹			
b.	<i>kiŋan</i>	<i>qapan</i>	<i>bulebun</i>	(現代)
	one	palm	banana	
	「ひと塊のバナナ (グローブ状のもの)」			
c.	<i>kiŋan</i>	<i>kuleŋan</i>	<i>qucurux</i>	(現代)
	one	kind	fish	
	「ある種の魚」			

4. 日数表現

Asai (1953:52)では、数詞に対し接頭辞 *muku-*が付いた形式を序数としているが、筆者の観察では *muku-*は第何番という特定の番号を表すための接辞というよりも、何日必要であるという動詞的意味を表す。実際、Asai が挙げた例も日数を表すものであった。Asai の例を(5-6)に示す。

(5) Asai (1953:52)

muku-rima ali yaku ani maha
time.length-five day 1SG perhaps go.FUT
mahedu tɔmatak.
finish cut.down.tree

“On the fifth day I may finish the deforestation.” (著者訳「五日目に私は開墾を終えるだろう。」)

(6) Asai (1953:52)

maha =ta muku-piya rabi.
go.FUT =1PL.INCL time.length-how.many night

“When shall we start?” (They have no calendar: it is the only way of expressing the date to count the times of going to bed!) (著者訳「いつ行こうか？」(彼らには暦がないため、眠りにつく晩の数を数えることが、日にちを表す唯一の方法である。))

Asai の例(5)は、序数的な表現「五日目」という意味で用いられ、(6)では「何日経過したら」という意味が込められていることがわかる。ところが、これらの例文は現代の話者によると、(5)では文法的に欠陥があり、(6)では意味が異なるという。例(5)を文法的な文にするには、*mukurima ali* の後に条件節を表す *do*、または「まだ」を表す助詞

⁹ 「伸ばした指の一つ分の長さ」を意図しているのだろう。

の *na* を加える。それら修正した例文を(5'a-b)に示す。

- (5') a. *muku-rima* *ali* *do*,
 time.length-five day COND
ani =*ku* *maha* *mahedu tumatak*.
 perhaps =1SG FUT finish cut.down.tree
 「五日したら私は開墾を終えるだろう。」
- b. *muku-rima* *ali* *na*,
 time.length-five day yet
ani =*ku* *maha* *mahedu tumatak*.
 perhaps =1SG FUT finish cut.down.tree
 「五日したら私は開墾を終えるだろう。」

- (6') *maha* =*ta* *muku-piya* *rabi*?
 go.FUT =1PL.INCL time.length-how.many night
 「我々は幾晩、(そこに)行くのか？」(期間を訊ねている)

現代では、数詞に接頭辞 *muku-* が付いた形式は日数がどれほど必要かを表す接頭辞である¹⁰。Asai の調査時に序数的な表現として用いられていた可能性がないわけではないが¹¹、本稿では *muku-* の付いた形式は日数表現として扱う。Asai の例(5-6)にもみられるように、現代でもこの日数表現のあとに、時間を表す語、*ali* 「日」、*rabi* 「晩」などが続く。例えば *muku-teru ali* は「三日を要する」という意味になる。表 2 に Asai (1953) に挙げられた形式と共に、現代の日数表現のデータをまとめる。

表 2 日数表現¹²

	1920 年代	現代
一日	<i>kijal</i>	<i>muku-kijān</i>

¹⁰ ちなみに、願望を表す要素として *muku* という、独立した語でもあり、接辞でもあるようなふるまいをする語がある。例えば、*muku =ku taqi* (DES=1SG.NOM sleep) 「私は眠りたい」では接語が後続する。また *muku taqi =ku* と表せ、ここでは動詞 *taqi* に付く接頭辞のようにふるまう。この願望を表す *muku* は「～したい、～を欲する、～を求める」と考えると、日数表現の *muku-* 「時間を要する」と意味的につながる部分もあり、本来同一の要素ではなかったかとも考えられる。

¹¹ アタヤル語群では序数の概念が発達するに至っていないのではないかと筆者は考えている。筆者の調査したセデック語パラン方言では、序数はもっぱら日本語からの借用語によって表す(例 *daiichi*, *daini*, *daisān*, *daiyōj*)。セデック語トゥルク方言では、Pecoraro (1977:200) において *ti pitu* 「第七番」という語に見られる *ti* は、恐らく中国語「第」からの借用語である。また、筆者の調査ではアタヤル語においても *te* 「第」という、恐らく閩南語からの借用語を用いて、*te qutux* 「第一」(*qutux* 「1」) と言う。ちなみに、月田(2009:241-242) ではセデック語トゥルク方言において序数に用いられる接頭辞は *taga-* だとするが、この接頭辞は落合(2016:173-175) におけるセデック語パラン方言の記述においては方向を表すものだとする。恐らく、本来方向を意味した接頭辞だったが、トゥルク方言では序数を表すようにもなったと考えられる。

¹² 少なくとも現代においては、厳密には「一日を要する、二日を要する」という意味である。

二日	<i>muku-daha</i>	<i>muku-daha</i>
三日	<i>muku-teru</i>	<i>muku-teru</i>
四日	<i>muku-sepat</i>	<i>muku-sepac</i>
五日	<i>muku-rima</i>	<i>muku-rima</i>
十日	<i>muku-maxal, ku-maxal</i>	<i>muku-maxan</i>
幾日	<i>muku-piða</i>	<i>muku-piya</i>

現代のセデック語パラソ方言で接頭辞 *muku-*が付く数詞は 1 から 5 までであった。六日以上になると、この派生形を用いるには違和感があると調査協力者はいう。そうすると例(7)のように *busiyag* 「時間が長い」という形容詞的表現を用いて表現する。

- (7) *maha* =*ku* *busiyag* *hari*.
 go.FUT =1SG.NOM long.time a.little
 「私は長い間(そこ)に行きます。」

どうしても、厳密に日数を言いたい場合は、数詞をそのまま用いる。ただし 10 に限り *muku-*が付く形式が得られた。疑問詞 *piya* 「幾つ」にも *muku-*が付く。一方、Asai の記述では 6 から 9 の数詞に接頭辞 *muku-*が付くかどうか触れていないが、数詞 10 に付く形式は挙げられている。また、Asai のデータでは数詞 1 はそのまま用い、*muku-*がついていない。これら日数表現を用いた現代の例文は(5'-6')にも示したが、以下(8)にも一例挙げる。

- (8) *muku-maxan* =*ku* *muquri* *Nakahara* *di*.
 time.length-ten =1SG.NOM go.toward Nakahara PART
 「十日の(時間を用いて)、中原の方へ(畑仕事に)行きます。」

例(9)に接頭辞 *muku-*の付かない例を挙げる。数詞 20 がそのまま用いられることで日数表現を表している。

- (9) *mpusan* =*ku* *ali* *muquri* *Paran* *di*.
 twenty =1SG.NOM day go.toward Paran PART
 「私は二十日間、パラソの方へ行っています。」

5. 「今日」を中心にした日の表現と数詞

現代では表 3 にあるように、日に関わる表現として「今日」を中心とした前後の日を表す語に数詞 1 と 3 が見られる。数詞 1 は非独立形の *xa* を用い、「明後日」を *mukaxa*、「一昨日」を *cunkaxa* とする。それぞれ *xa* の前に *muka-*と *cunka-*という接頭辞が付い

ている。これら接頭辞の後部 *ka-*は共通の接頭辞と考えられるため、それぞれに *mu-ka-*と *cun-ka-*に分かれ得る。これらは、「今日」を中心とした場合、「一日」挟んだ次の日という意味が込められているのだろう。また、「明々後日」「一昨々日」を表す語はともに *kunturuwan* とする。これは数詞 *teru* に接頭辞 *kun-*と接尾辞 *-an* を付けることで派生されている。ただし接尾辞の前に渡り音 *w* が挿入される。この語は、「今日」から数えた場合に三番目の日という意味が込められているのだろう。ここでは過去か未来かを分けないのが特徴的である。また、数詞 1 と 3 が使われるのに対し、その間の数詞 2 は使われていないのが興味深い。

表 3 「今日」を中心にした日の表現

<i>kunturuwan</i>	<i>cunkaxa</i>	<i>ciga</i>	<i>saya</i>	<i>kusun</i>	<i>mukaxa</i>	<i>kunturuwan</i>
一昨々日	一昨日	昨日	今日	明日	明後日	明々後日

6. 回数表現

Asai (1953:52–53)による 1920 年代のセデック語パラン方言では、「一回」を表す *munexal* または *texal* を除き、回数を表すには数詞に接頭辞 *mutu-*を付けるとする。ただし 60 回になると接頭辞を用いずに、数詞をそのまま用いている。また、ほとんどの形式で語末に接尾辞 *-l*、またはその変化形 *-n* が見られるのが特徴である。これを表 4 では太字で示す。ただし「六回、七回、九回」はこの接尾辞を持たない(60 回は除外)。第 2 節ではこの接尾辞を 10 の倍数を表すとしたが、これら回数表現の例の多さからして、本来、少なくともアタヤル語群内では、回数を表す接尾辞だったのではないかと考えられる。つまり、本来の回数という意味から 10 の倍数という意味が派生された。例えばアタヤル語の「一回」も *minxal* (小川 1931:28)であり、語根の非独立形数詞 1 の *xa* の後に接尾辞 *-l* を持つ。また以下に挙げる例文から明らかのように、これら回数表現は「何回する」という動詞的意味を表す。

現代のセデック語パラン方言において「一回」には *mun-texan*、*mun-exan* という自由変異が存在する。これらは語根 *xa* 「1」の前に *te-*または *e-*、後ろに *-n* が付いた語基 (*texan*、*exan*)から派生されている。また、数詞 1 に *mun-*を付けた形式 *munkiŋan* も変異形である。「二回」には、独立形数詞 2 の *daha* と非独立形数詞 2 の *pusa* のどちらにも接頭辞 *mun-*が付く。ただし *pusa* には接尾辞 *-n* も必要になる。このほか数詞 20 と同一形式の *mpusan* も「二回」を表す語として用いられる。

現代において回数を表す接尾辞 *-n* (表 4 の *munexan* 「一回」に接尾辞 *-un* が付いた派生形 *munuxalun* と、*mpusan* 「二回」に同様の接尾辞が付いた派生形、*mpusalun* において語基末の *n* が *l* で現れることから、古くは *-l* であったことがわかる)が付くのは一回と二回に限られ、しかも非独立形の数詞 1 (*xa*)と 2 (*pusa*)から派生したものに限られる。現代では、*mutu-*という接頭辞の形式は得られなかったが、代わりに *mun-*と言う接頭辞が回数表現を表す。これは Asai の「一回」の形式の一つである *munexal* の前部

と同様の配列音である。しかも *mun-* を付けられる数詞は 1 から 5 までに限られる。数詞 6 以上もの多数回になると実際の会話で用いられることはほぼないと調査協力者は言う。その場合は、*mun-egu* [munʔégu] 「何度も」(*egu* 「個数が多い」) と表現する。また、疑問詞の *piya* にも接頭辞 *mun-* は付加し「何回」を訊ねる語になる。

表 4 回数表現

	1920 年代	現代
一回	<i>munexal, texal</i>	<i>mun-texan, mun-exan (munuxalun), mun-kiŋan</i>
二回	<i>mutu-pusal</i>	<i>mun-pusan, mun-daha, mpusan (mpusalun)</i>
三回	<i>mutu-terun</i>	<i>mun-teru</i>
四回	<i>mutu-sipatl</i>	<i>mun-sepac</i>
五回	<i>mutu-rimal</i>	<i>mun-rima</i>
六回	<i>mutu-mumuteru</i>	---
七回	<i>mutu-mupitu</i>	---
八回	<i>mutu-mumusipatl</i>	---
九回	<i>mutu-muŋari</i>	---
十回	<i>mutu-maxal</i>	---
二十回	<i>mutu-mupusal</i>	---
三十回	<i>mutu-muterul</i>	---
四十回	<i>mutu-sipatl</i>	---
五十回	<i>mutu-murimal</i>	---
六十回	<i>mumuteru kumuxalan</i>	---
何回	記録なし	<i>mun-piya</i>

「一回」を用いた例を(10a-b)に挙げる。

- (10) a. *mun-kiŋan* =ku *mosa hiya.*
frequency-one =1SG.NOM go there
「私はあそこへ一回行った。」
- b. *mun-exan* =ku *bale mosa*
frequency-one =1SG.NOM arrucate go
sapah =na *Mona na.*
house =3SG.GEN Mona yet
「私はモナ（人名）の家へ一回しか行ったことがない。」

「二回」を用いた例を(11a-c)に挙げる。ただし(11c)に見られる形式 *mpusalun* は、*mpusan* からの派生形(非動作主態)である。接尾辞 *-un* が付いている。これと同様、*munexan* 「一回」の派生形として、*munuxalun* という形式もあることがわかった。

- (11) a. *mun-daha* =*ku* *mosa hiya.*
 frequency-two =1SG.NOM go there
 「私はあそこへ二回行った。」
- b. *mpusan* =*ku* *mosa hiya.*
 frequency.two =1SG.NOM go there
 「私はあそこへ二回行った。」
- c. *mpusal-un* =*na* *mosa hiya pusasiŋ.*
 frequency.two-UVP=3SG.GEN go there take.picture
 「彼はあそこへ写真を撮りに二回行った。」

回数表現の疑問文の例を(12)に挙げる。

- (12) *mun-piya* =*su* *gmeeguy*
 frequency-how.many =2SG steal
pila =*na* *tama* =*su.*
 money =3SG.GEN father =2SG
 「君は何度、君の父親の金を盗んだのか。」

7. 分配表現

表 5 に見られるように Asai (1953:53)は、分配表現として数詞 1 と 2 の完全重複形を挙げている。現代でもこれらを用いる。また現代では、数詞 1 から派生された *sukukiŋan* という形式も得られた。数詞 3、4、5 の完全重複形 *teru teru*、*sepac sepac*、*rima rima* も得られた。これら完全重複形のアクセントは、後部の語のみに置かれる(例 [kiŋan 'kiŋan])。

表 5 Asai (1953)における重複を用いた分配表現と相当する現代セデック語パラン方言の形式

	1920 年代	現代
一つずつ	<i>kijal kijal</i>	<i>kiŋan kiŋan, suku-kiŋan</i>
二つずつ	<i>daha daha</i>	<i>daha daha</i>

これらの語を用いた現代での例文を(13-15)に挙げる。これらは(14-15)に見られるように、人数「何人ずつ」を表すこともある。

- (13) *suku-kiyan ooda =su.*
DIST-one process 2SG.GEN
「一つずつ仕事をかたづけなさい。」
- (14) *daha daha tuloonj.*
two two sit
「二人ずつ座りましょう。」
- (15) *teru teru mosa namu meepah.*
three three go =2PL.NOM work.in.field
「あなたたちは三人ずつに分かれて畑仕事をします。」

このほか、表 6 に挙げたように現代の分配表現には、数詞に対し接頭辞 *pun-* の付いた形式も見られる(左列)。「幾つずつ」という疑問表現は *pun-piya* で表す。右列の命令形については後述する。

表 6 派生を用いた分配表現

	叙述形	命令形
一つずつ	<i>pun-kiyan</i>	<i>ku-kunjal-i</i>
二つずつ	<i>pun-daha</i>	<i>pu-daha-i</i> ¹³
三つずつ	<i>pun-teru</i>	<i>pu-turu-i</i>
四つずつ	<i>pun-sepac</i>	<i>pu-supat-i</i>
五つずつ	<i>pun-rima</i>	<i>ku-ru-rima, pu-ru-rima</i>
六つずつ	<i>pun-mumuteru</i>	---
七つずつ	<i>pun-umpitu</i> [pun?umpitu]	---
八つずつ	<i>pun-mumusepac</i>	---
九つずつ	<i>pun-munari</i>	---
十ずつ	<i>pun-maxan</i>	--
十一個ずつ	<i>pun-maxan kiyan</i>	---
百個ずつ	<i>pun-kiyan kubekuy</i>	---
幾つずつ	<i>pun-piya</i>	---

以下(16–19)に、疑問詞を用いた例文、「一つずつ」、「二つずつ」を用いた例文を挙げる。

¹³ 子音 *d* の直後の母音は前次末音節に当たり、弱化母音 *u* が期待されるところだが、直後の子音 *h* の作用により、*h* の後ろの母音 *a* に同化して現れる。

- (16) *pun-piya* =*ta* *masu* *hulama ni.*
 DIST-how.many =1PL.INCL distribute sweets this
 「何個ずつおかしを分けようか。」

- (17) *pun-kiyan* =*ta* *masu* *hulama ni.*
 DIST-one =1PL.INCL distribute sweets this
 「一人に一つ配りましょう。」¹⁴

- (18) *egu* =*naq* *hulama* *de*
 many =EMPH sweets COND
maha *pun-daha* *di.*
 FUT DIST-two PART
 「おかしがたくさんあったら、一人に二つ配ります。」

このほか、表4の右列に見られるように、数詞1から5までに限り、分配表現の命令形も派生によって作られる。数詞1から4までは、命令の接尾辞-*i*が付いた形式を用いている¹⁵。数詞5では接尾辞の無い形式のみである。ともに用いられる接頭辞には*ku-*または*pu-*である¹⁶。数詞5の場合はさらに語根の第一音節が重複している。数詞1から4までが同じパターンの派生であるのに対し、数詞5は異なっている点が注目される。例(19-20)に数詞1と2から派生された分配表現の命令形を挙げる。

- (19) *ku-kujal-i* *mege* =*su* *hulama.*
 SV.IRR/RDP¹⁷-one-IMP.UVP/UVL give =2SG.NOM sweets
 「おかしを一人に一個あげなさい。」

- (20) *pu-daha-i* *mege* *hulama.*
 CAUS-two-IMP.UVP/UVL give sweets
 「おかしを一人に二個あげなさい。」

ただし、これら派生による命令形は古い言い方と捉えられており、現在では、動詞を命令形にし、数詞はそのまま用いた表現、*biq-i daha* (give-IMP.UVP/UVL two) 「二つ与える」などが使われる。

¹⁴ 例えば、おかしが六個あったとして、二人でこれらを分ける場合に *punkijan* と表現したなら、一人一個取るだけで、余りの4個には手を付けないことになる。

¹⁵ この命令を表す接尾辞は、非動作主態(対象主語/場所主語)を表す。

¹⁶ 接頭辞 *ku-*の本来の用法は静態動詞の非現実、接頭辞 *pu-*の本来の用法は使役である(落合 2016)。

¹⁷ 接頭辞が非現実か重複かどうかどちらかわからないことを示している。

8. 共同作業の表現

共同作業をする際の命令形として、*ku-daha-i*「二人でしろ」、*ku-turu-i*「三人でしろ」、*pu-supat-i*「四人でしろ」という語が得られた。これらの形式は分配表現の命令形に類似している。数詞 2 と 3 に関しては、分配表現の命令形は接頭辞が *pu-* であるが、共同作業の命令形の接頭辞は *ku-* になっている。数詞 4 に関しては、分配表現の命令形と共同作業の命令形は同一形式である。

また、意味的にも共同作業は、作業の負担を何人かで分担するという点で、物を分けるという意味を持つ分配表現とつながっており、「四人でしろ」という共同作業の表現に、分配表現の接頭辞 *pu-* と同じ接頭辞が見られるが、同一の接頭辞の可能性はある。以下(21-22)に共同作業の命令形を用いた例文を挙げる。

- (21) *chehedin* *riyuŋ* *babuy* *ki*,
heavy very pig that
ku-daha-i *meheyan* =*namu*.
SV.IRR-two-IMP.UVP/UVL shoulder =2PL.NOM

「その豚は重いから、二人で担ぎなさい。」

- (22) *daha* *bukuy* *daha* *berah*,
two back two front
pu-supat-i *meheyan* =*namu* *babuy* *wa*.
CAUS-four-IMP.UVP/UVL shoulder =2PL.NOM pig that

「後ろに二人、前に二人、四人で豚を担ぎなさい。」

9. 人数表現

Li (2006)は台湾オーストロネシア諸語において人を数える数詞とそれ以外とは形式が異なり、人を表す場合は初頭子音の重複により表すとしている。この論文において、セデック語パラソ方言に関しては *ddaha* 「二人」の一形式のみが挙げられている(次末音節に強勢が置かれ、それより前の音節は母音が弱化する。ここでは前次末音節の弱化母音を表記していない)。また Asai (1953)にはこの人を数える表現に関する表記は見られない。そのため本節では人数表現に関する記述を補う。

数詞から派生された人数表現は、表 7 の左列に挙げたように 1 から 5 までに限られる。「一人(でする)」の場合は非独立形数詞 *xa* に対し、接頭辞 *ta-* が付いた形式を持つほか、独立形の *kijan* も使われる。「二人(でする)」、「三人(でする)」、「四人(でする)」の場合は、数詞に対し *mu-Cu-* という要素が接頭辞として付いており、後半の *Cu* の部分は語根の初頭子音の重複を示している。前半の *mu-* の部分は動詞的働きを示す接頭辞である。また、この *mu-Cu-* には接頭辞の初頭子音 *m* が *p* に変わった形

式がある。この形式は命令形でもあり、否定辞 *ini* (動詞否定) または *iya* (禁止) のあとに現れる形式でもある。

「五人(でする)」における接頭辞は異なっており *su-ru-* である。前半の接頭辞の *su-* の由来はわからないが、後半の *ru* は語根の初頭子音の重複から成る。「何人(でする)」という派生形 *pu-piya* もあり、他の数詞同様ここでも重複形が用いられる。六人以上になると数詞をそのまま用いるか、*seediq* 「人」を後続させることで表す (*mumuteru seediq* 「六人」)。

ただし、「二人の子供」など人を表す名詞を伴う場合は、単に数詞の後ろに人を表す名詞を置く。例えば、「二人の子供」は *daha laqi* (two child) となる。

表 7 人数表現

	叙述形	命令形/否定辞後の形式
一人(でする)	<i>taxa, kijan</i>	---
二人(でする)	<i>mu-du-daha</i>	<i>pu-du-daha</i>
三人(でする)	<i>mu-tu-teru</i>	<i>pu-tu-teru</i>
四人(でする)	<i>mu-su-sepac</i>	<i>pu-su-sepac</i>
五人(でする)	<i>su-ru-rima</i>	---
何人(でする)	<i>pu-piya</i>	---

「一人(でする)」の例を(23a-c)に、「五人(でする)」の例を(24)に、疑問詞 *pupiya* 「何人」を用いた例を(25)に挙げる。

- (23) a. *taxa bale wada neepah hiya.*
one.person accurate left field there.

「彼は一人であそこの畑へ行きました。」

- b. *yaku =naq kijan mosa.*
1SG =self one go

「私は一人で行った。」

- c. *kijan =ku =naq.*
1SG =1SG.NOM =self

「(他の人たちは組を成すのに対し) 私は一人で行動する。」

- (24) *su-ru-rima miyan muuyas uyas rudan cubeyo.*
?-RDP-five =1PL.NOM sing song elder past

「私たちは五人組になって先祖から伝わる歌を歌うのです。」

- (25) *pu-piya seediq ga hiya.*
RDP-how.many person EXIST there
「あそこに何人いますか。」

次に *pu-Cu-*という、命令文の述語としての形式、または否定辞後の形式を用いた例を(26–27)に挙げる。

- (26) *pu-du-daha tuloon gakac ni.*
IMP-RDP-two sit chair this
「二人でこの椅子に座りなさい。」

- (27) *iya pu-du-daha tuloon.*
PROH IMP-RDP-two sit
「二人で座ってはいけません。」

派生形を用いない人数表現の例として「七人」を(28)に挙げる。数詞をそのまま用いる。

- (28) *mpitu seediq musa puhulij.*
seven person go hunt
「七人で猟に行く。」

10. おわりに

本稿はセデック語パラン方言の数詞に関わる表現について Asai(1953)における記述と比較し、現代の用法を記述した。また、数詞から派生した表現(日数表現、回数表現、分配表現、共同作業の表現、人数表現)に関しては、数詞 5 まで、または数詞 4 までに限定されていることが多いことが分かった。

参考文献

- Andersen, David (1999) Moronene numbers. In David Mead (ed.) *Studies in Sulawesi linguistics, Part V*: 1–72.
Asai, Erin (1953) *The Sedik language of Formosa*. Kanazawa: Cercle Linguistique de Kanazawa.
Blust, Robert, and Stephen Trussel (2010) *The Austronesian comparative dictionary: A work in progress*, web edition. <http://www.trussel2.com/acd/> [accessed Sep 2019].
Bullock, Thomas L. (1874) Formosan dialects and their connection with the Malay. *China review, or notes and queries on the Far East* 3:38–46.
Holmer, Arthur (1996) *A parametric grammar of Seediq*. Lund: Lund University Press.

Li, Paul Jen-kuei (2006) Numerals in Formosan languages. *Oceanic linguistics* 45(1):133–152.

落合いずみ (2016)「セデック語パラン方言の文法記述と非意志性接頭辞の比較言語学的研究」博士論文, 京都大学.

Ochiai, Izumi (2016) Bu-hwan vocabulary recorded in 1874: comparison with Seediq dialects. *Asian and African languages and linguistics* 10:287–324.

Ochiai, Izumi (2019)「泰雅語群の数詞一和從此衍生的詞家族」2019 世界南島暨原住民族分享會口頭発表. 國立清華大學, 2019年6月14日.

小川尚義 (1931)『アタヤル語集』台北: 台湾総督府.

小川尚義 (1944)「インドネシア語に於ける台湾高砂語の位置」平野義太郎 (編)『太平洋国一民族と文化』451–502. 東京: 河出書房.

Pecoraro, Ferdinando (1977) *Essai de dictionnaire Taroko-Français*. Paris: Société pour l'étude et la connaissance du monde insulindien.

月田尚美 (2009)「セデック語 (台湾) の文法」博士論文, 東京大学.

Zeitoun, Elizabeth, Stacy, Fang-ching Teng, and Raleigh Ferrell (2010) Reconstruction of '2' in PAN and related issues. *Language and linguistics* 11(4):853–884.

執筆者紹介

氏名 : 落合いずみ

所属 : 神戸市外国語大学

Email : izumi-ochiai.3g@inst.kobe-cufs.ac.jp